

肺がん等検診のおすすめ

●がんによる死亡の上位は肺がんです

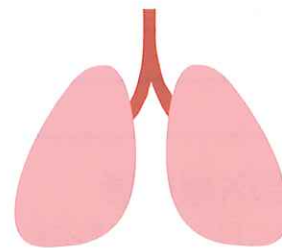
2019年がん部位別死亡者数

【全国】

全体	部位	人数
1位	肺	75,394
2位	大腸	51,420
3位	胃	42,931
4位	膵臓	36,356
5位	肝臓	25,264

【秋田県】

全体	部位	人数
1位	肺	731
2位	胃	657
3位	大腸	616
4位	膵臓	360
5位	胆のう	262



国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」・R2 がん対策施策報告書 より

2019年では全国で75,394人の方が、肺がんが原因で亡くなっています。秋田県でも部位別のがん死亡者数は肺がんが1位でした。罹患率は40歳代後半から増加し始め、高齢になるほど高くなります。

肺がんはその性質によって4種類のがん(扁平上皮がん・腺がん・小細胞がん・大細胞がん)に分類されます。肺がんの約6割は腺がんが占めており、たばこの影響が大きいとされる扁平上皮がんは男性に多いのですが、腺がんは非喫煙者にもおこるのが大きな特徴であり、女性に多くみられるがんです。

●喫煙によるリスク

がんになった人のうち、男性で30%、女性で5%はたばこが原因だと考えられています。

たばこを吸う人のがんで死亡するリスクは、吸わない人に比べて男性で2倍、女性で1.6倍です。

○喫煙による悪影響

たばこを吸っているがん患者では、がんの再発、治療効果の低下、別の新たながんが発生しやすいこと等の悪影響があると考えられています。

○受動喫煙

たばこを吸う本人の周囲がたばこの煙にさらされ、間接的に喫煙してしまうことをいいます。

受動喫煙も様々な健康被害を引き起こすという研究結果が出ています。

○禁煙によるメリット

現在たばこを吸っている人も、禁煙によりがんになるリスクを下げることができます。

自分と、周囲の人の健康のためにも、禁煙に取り組みましょう。

●定期的に検診を受けましょう

初期の肺がんは症状が出にくく、あったとしても「風邪やたばこのせいだ」と思い気が付かないことがあります。咳や痰(血痰)、発熱、呼吸困難、胸痛などの呼吸器症状が続くときは、医療機関を受診しましょう。

また、無症状のうちに検診をした人では、早期のがんが発見される可能性が高いです。早期発見・早期治療が重要ですので、症状が出ていない場合も、**40歳を過ぎたら必ず毎年検診を受けましょう。**



肺がん等検診はこうして行います

受付

問診…気になる症状があればお申し出ください

胸部X線撮影

大きく息を吸って肺を膨らませ、息を止めた状態で胸部のX線撮影をします。その際無地のTシャツ(肌着)一枚で撮影します。金具のついた衣類や体を締め付けるゴムが入った下着・アクセサリー・エレキバン・湿布等は外してください。

喀痰細胞診検査

50歳以上で喫煙指数(1日喫煙本数×年数)が600以上の方が対象です。3日間、出来る限り早朝に採取した痰を提出してください。痰に混じった細胞を顕微鏡で検査して、がん細胞がないかを調べます。

※喀痰細胞診検査で要精密検査となった場合、喀痰細胞診検査の再検は不適切です。必ず精密検査を受けてください。

異常なし
精密検査不要

異常あり
要精密検査

必ず受診してください。

精密検査

異常なし

良性疾患

がん

次回の検診

主治医の指示に従ってください

治療

妊娠中・妊娠の可能性のある方は検診を受けることができません。

現在呼吸器疾患により治療中または経過観察の方または肺がんの診断を受け治療中の方は検査の対象外となります。

問診では、自覚症状の有無、喫煙状況、過去の検診の受診状況などをお聞きします。

「要精密検査」の結果が届いたら……

精検依頼書と健康保険証をもって必ず専門医療機関を受診してください。

精密検査では、CT検査や気管支鏡検査を行います。

CT検査

X線を照射し、身体の内部を画像化する検査です。身体を輪切りにした断面像が得られるため、病変が疑われた部分の構造をより詳しく調べることができます。

気管支鏡検査

気管支鏡を口や鼻から気管支に挿入して、病変が疑われた部分を直接観察する内視鏡検査のことです。必要に応じて組織を採取し、検査します。

精密検査の結果は自治体と関係医療機関で共有し、検査の精度向上に努めています。

検診ですべてのがんが見つかるわけではありません。また、がんでなくても検診の結果が「陽性(要精密検査)」となる場合もあります。しかし、胸部X線検査及び喀痰細胞診による肺がん検診は肺がんの死亡率・罹患率を減少させる有効性が認められています。

早期発見のために、**40歳以上の方は必ず1年に1度、検診を受診してください。**

なお、気になる症状がある場合は次の検診を待たず、すぐに専門医を受診しましょう。